

# 日英語のモダリティ体系にみられる意味変化の方向性の違い

守屋 哲治\*      堀江 薫\*\*

\*金沢大学教育学部

\*\*東北大学大学院国際文化研究科

[moriya33@kenroku.kanazawa-u.ac.jp](mailto:moriya33@kenroku.kanazawa-u.ac.jp)

[khorie@intcul.tohoku.ac.jp](mailto:khorie@intcul.tohoku.ac.jp)

## 1. はじめに

英語では *may*, *must*, *should* のように deontic (遂行的: 義務など) と epistemic (認知的: 推量など) のモダリティを一つの法助動詞が表し、歴史的には前者から後者の意味が拡張によって生じたと考えられている (Sweetser 1990, Bybee et al. 1994)。一方、日本語においては、古代語においては「べし」(推量・義務)、「む」(推量・意志)のように両方のモダリティの意味が併存している助動詞が存在し、これらの助動詞に関しては、「deontic epistemic」あるいはその逆という拡張関係を確認するのは困難である。しかも、現代日本語においては、英語と異なり、中古語の法助動詞体系がほとんど受け継がれず、「なければならない」(義務)「にちがいない」(推量)のように deontic と epistemic のモダリティが別形式で分化しているという英語では見られない現象が存在する。本稿では、このような両言語に見られる意味変化の方向性の違いを、言語類型論、認知言語学の観点から解明する。

## 2. 英語のモダリティ体系

英語の法助動詞が表す意味の歴史的発達に関しては、deontic から epistemic へと進んできたとされている。

*may* を例にとると、この語は Old English における “be strong” を意味する *magan* に由来し、deontic の意味からさらに epistemic の意味へと拡張した (Ehrman 1966; Shepherd 1982)。また、*can* は古英語期には “to know” の意味を表す本動詞であったが、古英語後期に “to be able, have power” の意味を持つようになり、その後、中英語期に可能性の意味が、近代英語期に許可の意味が生じた (寺澤 1997)。

このような意味変化の背後にあるメカニズムに関しては、メタファー的な拡張と見る見方と、含意の慣習化という見方が存在している。

前者の立場をとる Sweetser (1990) では、*may* は deontic の意味において「社会・物理的な世界での障壁が存在しない」ことを意味し、そのイメージ・スキーマ構造が保存されたまま推論の意味に拡張して「現存する前提から結論にいたる話者の推論のプロセスに障壁が存在しない」ことを意味するようになったと主張している。

後者の立場に立つ Traugott (1989), Traugott

and König (1991) では、(1) のような deontic な *must* を含む文は、含意として certainty を表し、それが *must* の意味として定着することによって epistemic の意味が生じたと主張している。

(1) Mary must be married.

これらの立場について Bybee (1988) や Bybee et al. (1994) は、中英語期における deontic の *may* の用例の多くが epistemic な含意を持っていることから含意の慣習化の見方を支持しているが、*must* に関しては多義的な解釈ができる用例は非常に限定的であることからメタファーの拡張の見方が妥当だとしている。

このような経過を経て発達した英語法助動詞のモダリティ体系では、同一の助動詞が deontic と epistemic の両義を持ち、迂言的助動詞を用いる場合以外は、両者の助動詞が共起することがない：

(2) a. John may be able to pass the exam.  
b. \*John may can pass the exam.

deontic から epistemic への意味拡張は、文法化 (grammaticalization) の唯一方向性 (unidirectionality) を示す例としてよく取り上げられており、特に Bybee et al. (1994) では多くの言語の調査からこの意味拡張の普遍性が強調されている。次節では、このような点に関して日本語がどのような特徴を持っているのかを観察する。

## 3. 日本語のモダリティ体系

日本語では、英語などとは違い、文献資料が現存する中古語の段階ですでに、モダリティを表す助動詞は deontic と epistemic の両義を併存させている。以下に代表的な助動詞「べし」と「む」の意味を広辞苑第五版を参考に挙げる：

(3) 「べし」  
当然の意。  
イ ...するのがもっともだ。  
ロ ...するはずだ。  
ハ ...しなければならない。

確実な推量の意。

イ きっと...するだろう。

ロ ...するらしい。

ハ ...する予定だ。

話しての動作に付いて、意志・決意を表す。

...しよう。...するつもりだ。

可能の意...することができそうだ。

命令の意。...せねばならない。

#### (4) 「む」

予想を表す。...だろう。

時に関係なく一般的な推量もしくは空想を表現する。...だろう。

将来の、または一般的な事実を仮想する意を表す。もし...なら。たとえば...だろう。

話しての動作に付いて意志・決意を表す。...しよう。

手の動作にはたらきかける時には、勧誘誘えを表す。...しよう。...するのがよい。...してほしい。

適当・当然を表す。...するのがよい。...すべきはずである。

その一方で、中古語のモダリティ体系のもうひとつの特徴として、epistemicな意味が優勢だったと考えられる点が挙げられる。これはepistemicを示すモダリティ形式が細かく分化していることから見てとれる：

(5)	当為・推定	ベシ
	推量	ム、ラム、ケム、マシ
	推定	メリ、終始ナリ
	否定推量	マジ、ジ

高山(2002:11)

このような点を踏まえると、少なくとも中古語を見る限り、「deontic epistemic」という変化の方向性を観察することはできない。ひとつの可能性として、文献資料が残る中古語の段階ですでに「deontic epistemic」という変化が完了しているということが考えられる。しかし、高山(2002: 65-78)や近藤(2000:457-469)が係り結びや従属節内の生起の違いなどから示しているように、epistemicのモダリティ自身がすでに意味的階層性を持っていると考えられ、英語などでみられた変化の図式が簡単にはあてはまらないように思われる。

歴史的変化という点から注目すべき日本語のモダリティ体系の特徴として、中古語のモダリティ体系と現代語のモダリティ体系との間には大きなずれがあるということが挙げられる。中古語でモダリティを表してい

た助動詞の中で現代語に引き継がれていかなかったものが多くある。近藤(2000:473-481)は、中古語のモダリティの語形を(6)で示したような三つにグループ分けして、その性質の違いを論じている：

- (6) A 「べし」類：「べし」・「まじ」  
B 「めり」類：「めり」・「終止なり」  
C 「む」類：「む」・「らむ」・「けむ」・「じ」

そして、現代語への変化の要点を(7)のように整理している：

- (7) 1. Aのグループが勢力を弱め(文末用法の弱化)、Cのグループが残存した。  
2. Cのグループの中でも「む」だけが残った。  
3. Bのグループは語形が消滅した。

この変化の過程も、「deontic epistemic」という変化というよりはepistemicの体系内の変化とみるべきだろう。また、これらの変化によって消滅した部分を補うように現代語では「かもしれない」「にちがいない」といった複合的な形式を持った助動詞が登場している。これらの助動詞ではepistemicとdeonticの多義性は解消されており、結果的に英語とは違って「なければならない」(義務)、「にちがいない」(推量)のようにdeonticとepistemicが別形式で存在するという役割分担が成立している。

また、中古語から現代語へ引き継がれたものも概してその意味が狭められている。この点に関してはHorie(1997)が中古語から音韻、形態、統語上の変化を経て現代語に引き継がれた「べきだ(> べし)」「う・よう(> む)」といった助動詞の意味変化を取り上げている。これらの助動詞は、現代語でそれぞれ「義務」「(一人称主語の)意向、提案」というdeonticな意味を表し、(5)で示したように中古語の「べし」「む」がそれぞれ持っていた「当為・推定」、「推量」というepistemicな意味は「べきだ」のように完全に消失しているか、あるいは「う・よう」の場合のように標準語では用いられなくなっている(推量の「雨が降ろう」は標準語では用いられにくくなっている)。

以上、本節では、日本語の中古語においては、モダリティを表す助動詞はdeonticの意味を多義的に担いながらもepistemicな意味を中心に表す体系を持っていたが、現代語に変化していく過程でモダリティの助動詞の体系が整理・統合され、それを補うように複合

的な形式の助動詞が生れ、さらにそれに伴って deontic の助動詞と epistemic の助動詞の分化が起こり、中古語から引き継がれた助動詞もその意味が狭まっていることを見た。

個々の助動詞の消長に関する動機付けの研究については今後の課題にし、次節ではこのような全体的な変化の背後に働いていると考えられる認知的な動機付けについて考察する。

#### 4. 多義性の解消：意味の分化と多音節化

小松(2001)では、日本語の語彙は単音節語から多音節語へと変化しており、その動機付けとして多義性の解消があるとしている。

- (8) 葉：<sup>は</sup>ハツパ、<sup>葉</sup>菜：<sup>な</sup>ナツパ  
 ホー：<sup>ほ</sup>ホツベタ 子：<sup>こ</sup>コドモ

(8)に挙げたような語の組は、単音節名詞はフォーマルな文体で使用され、2音節名詞、3音節名詞はインフォーマルな文体に使用されるという特徴を持つが、後者の語形は他の語との聞き分けを容易にするために補強された語であると主張している（小松 2001:58-59）。従って、「うちのコが、いちばんかわいい」のように確実に識別できる文脈では、口頭言語でも単音節の語形が使用されるとしている（小松 2001: 62）。このように日本語は歴史的に語の音節数を増やすことによって語の多義性の解消をはかってきた側面があることは確実であると思われる。

本稿では、このような傾向が名詞のような内容語だけでなく、助動詞のような機能語の変化においても作用しているのではないかと考える。すなわち、中古語の多義的なモダリティの助動詞の体系が、迂言的な助動詞を導入することによってその多義性を解消していき、その流れの中で deontic と epistemic の役割分担が生じ、同時に中古語から残存する助動詞もその意味を狭めて現代語に引き継がれていったのではないかと考える。しかし、多音節化をするにしてもなぜ、補文化辞、動詞、否定辞などを含んだ句がモダリティ表現として定着していったのかという点を明らかにしていく必要がある。

この仮説を検証していく上で興味深い事実として、日本語と韓国語におけるモダリティ表現の平行性が挙げられる。Horie(2003)が詳細に示しているとおり、韓国語の deontic, epistemic の助動詞にも日本語と同様に迂言的なものとそうでないものがあり、特に迂言的なものはそのほとんどが日本語と構造が同じである。(9a)は日本語の「かもしれない」、(9b)は日本語の「てもいい」に相当する表現を含んだ文である：

- (9) a. *-ci (to) moluta* (NOML-(also)-not know)<sup>1</sup>

Ce-nun            naynyen hankwuk-ey ka-l  
 I:HUM-TOP next year Korea-to go-ADN  
**cito molu-pnita.**  
 may-POL:DECL  
 ‘I may go to Korea next year.’

- b. *-to toyta/cohta* (also-become/be good)

Yeki-se            tampay-lul    phiw-e  
 this place-LOC cigarette-ACC smoke-CONJ  
**to toy-pnikka?**  
 may-POL:Q  
 ‘May I smoke here?’  
 (lit. Is it OK if I smoke here?)  
 Horie (2003:209)

韓国語はハングル文字が発明される15世紀以前の文献資料が非常に少なく、日本語にくらべて韓国語の歴史的变化に関する研究はさかんとは言えない。しかし、すくなくとも構造が非常に類似した迂言的表現が両言語に存在するという事実は、両言語が用いられている社会に共通の要因が影響していることを思わせる。<sup>2</sup>

また、それと同時に多義性の解消という動機付けの中で新たな文法化のプロセスが始まり、それが現在の体系を作っているという側面も当然考慮にいれるべきであろう。文法化の理論の中でこのような迂言的表現の登場および定着をどう説明できるかも重要な課題になる。

#### 5. まとめ

本稿では、英語のモダリティを示す助動詞が「deontic epistemic」という変化を示しているのに対して、日本語の場合には epistemic な意味を中心に担う多義的な助動詞の体系が、多音節化と狭義化を通して多義性を解消していき、deontic と epistemic の明確な役割分担ができあがったとする説を提示した。このような対比から少なくとも「deontic epistemic」という変化の図式が日本語には単純に当てはまるものではないことを示した。

今後この仮説を検証していくにあたっては多くの課題が残されているが、まず、なぜ中古日本語の体系が epistemic を中心とした体系になっていたのか、という点を説明する必要がある。また、多音節化の過程で迂言的表現がなぜ導入されてきたのか、という点を文法化の理論の中で考察すると同時に、日本語と韓国語に共通に影響を与えた社会・文化的背景を探るといふことも必要になるだろうと考えている。

## 謝辞

本研究は、21世紀COEプログラム「言語・認知総合科学戦略研究教育拠点」(東北大学大学院国際文化研究科)による補助を受けて行われています。

## 注

- 1 グロスに用いた略号の意味は以下の通り  
ACC = accusative; ADN = adnominal;  
CONJ= conjunctive; DECL = declarative;  
HUM = humble; LOC = locative; NOML =  
nominalizer; POL = polite; Q = question;  
TOP = topic
- 2 そのような共通の要因として例えば漢文訓読体の影響が一つの可能性として考えられる。日本語では山田(1935)の研究でも示されている通り、漢文訓読体が日本語の表現に影響を与えていることは知られている。一方韓国語でも12-13世紀には漢文訓読が行われていたことを示す証拠が1973年に見つかり、2000年には漢文訓読がそれ以前の11世紀に行われた可能性を示す文献が発見されたとのことである。この点については今後考察を深めていきたい。

## 参考文献

- Bybee, Joan. 1988. "Semantic substance vs. contrast in the development of grammatical meaning." *Proceedings of the Fourteenth Annual Meeting of Berkeley Linguistics Society*, 247-264.
- Bybee, Joan, Revere Perkins, and William Pagliuca. 1994. *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Ehrman, Madeline E. 1966. *The meanings of the modals in present-day American English*. The Hague: Mouton.
- Shepherd, Susan C. 1982. "From deontic to epistemic: an analysis of modals in the history of English, Creoles, and language acquisition.." In A. Ahlqvist ed. *Papers from the fifth International Conference on Historical Linguistics*. Amsterdam: John Benjamins, 316-323.
- Horie, Kaoru. 1997. "Form-meaning Interaction in Diachrony: A Case Study from Japanese." *English Linguistics* 14, 428-449.
- Horie, Kaoru. 2003. "Differential Manifestations of "Modality" between Japanese and Korean: A Typological Perspective." In: Chiba, Shuji et al. (eds.) (2003) *Empirical and Theoretical Investigations Into Language: A Festschrift for Masaru Kajita*, 205-216. Tokyo: Kaitakusha.
- 小松英雄 2001. 『日本語の歴史：青信号はなぜアオなのか』東京：笠間書院

近藤泰弘 2000. 『日本語記述文法の理論』東京：ひつじ書房

森山卓郎, 仁田義雄, 工藤浩 2000. 『モダリティ』東京：岩波書店

Sweetser, Eve. *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge: Cambridge University Press.

高山善行 2002. 『日本語モダリティの史的研究』東京：ひつじ書房

寺澤芳雄編 1997. 『英語語源辞典』東京：研究社

Traugott, Elizabeth Cloth, and Bernd Heine, eds. 1991. *Approaches to Grammaticalization*. 2 vols. Amsterdam: Benjamins.

Traugott, Elizabeth Cloth, and Ekkehard König. 1991. "The semantics-pragmatics of grammaticalization revisited." In Traugott and Heine . 1991, vol. 1: 189-218..

山田孝雄 1935. 『漢文の訓読によりて伝へられたる語法』東京：寶文館